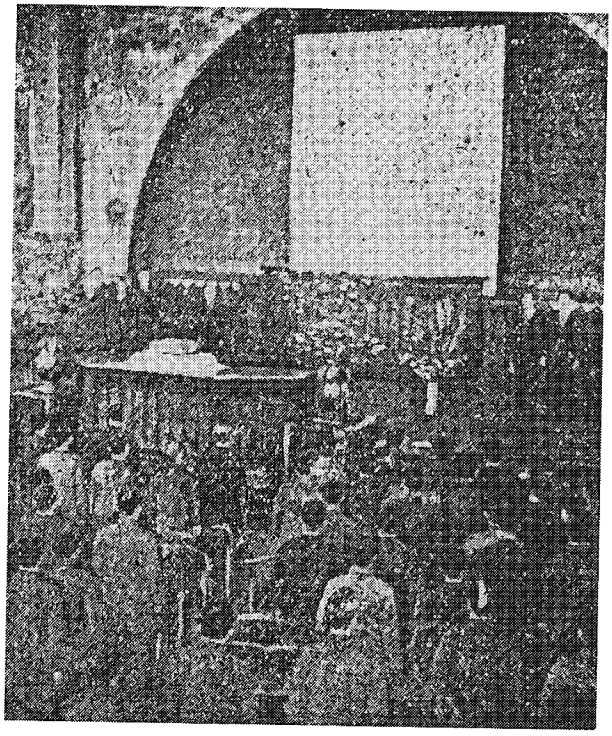
ISSN 0915-3284

東京大学史史料室ニュース

第12号　1994・3・31

目　次

委員長 …… 2
出陣、戦没学生に関する調査について … 3
大学沿革史にみる「学徒出陣」—その1　5
南原総長告文（昭和21年3月30日） …… 9
学徒動員・学徒出陣関係調査日誌抄録 …11
学徒動員・学徒出陣関係購入図書及び
寄贈旧制高等学校同窓会名簿一覧 ……11
史料室日誌抄録 ……12



學園に還る英靈一四二柱
贖罪と決意に涙新
東大大講堂で慰靈祭

「悔多き太平洋戦争の犠牲として戦陣に歿し、或は空襲に斃れた教職員、学生生徒の霊を慰め今次戦争への反省と今後の決意を新にする東大慰霊祭は、去月三十日午後一時から大講堂で南原総長祭主となり教職員、学生生徒参列の上、しめやかにとり行われた」

（大学新聞　昭和21年4月1日付の紙面より）

学徒動員・学徒出陣の調査について

高　橋　　進

今回、東京大学として標題に掲げた件を調査することになった。本ニュースの紙面を借りて、本調査の概要と状況を記し、今後の支援と協力をお願いすることにしたい。

昨年は学徒出陣50周年にあたり、ＴＶ・新聞・雑誌などの報道でも大きく取り上げられ、かつ多くの大学などで催しが挙行された。本学では戦後直後の昭和21年３月30日、南原繁総長のもと、「東大戦没並に殉職者慰霊祭」が執り行われた（本ニュースの表紙にはその時の写真を、本文には告文を採録した）。しかし、「東京大学百年史」の年表にはこの21年以降、本学で慰霊祭あるいは学徒動員、出陣に関する事実確認、追跡調査などが行われたという記録は見当たらない。

ところで、東京大学百年史の編纂事業が終了して７年が経過したが、戦時中の史料に関しては充分に収集がなされているわけではない。本調査にかかわるいわゆる学徒動員、学徒出陣、あるいは職員などの応召及び解除届などの公文書は、その詳細は不明であるが、百年史編纂当時も現在も確認されていない。

このような史料の現状にあっても、このたびの調査が持つ意義は大きい。様々の側面からの調査が考えられるが、本調査は当面、戦時体制と大学、太平洋戦争と東大という、近代日本の大学にとって類まれな経験を検証・反省すること、かつ学業半ばで戦地に赴き、死亡あるいは復員した多くの学生生徒たちの軌跡を、すべてではないにしろその一断面を、明らかにすることにある。

このような趣旨にそって、今回はまず２つの側面の調査を行いたい。一つは制度・政策の側面であり、もう一つは実態の分析である。前者の政策分析は、戦時体制と大学という側面を中心にする。修業年限の短縮、兵役法の改正、徴兵猶予の停止、学徒動員、出陣などの措置に対して、大学はどのように対応したのかを含め、当時の大学行政などの制度を明らかにする。さらに、後者の実態の分析では学生などの勤労動員先の調査、入隊・入団、と復員あるいは戦没などのパーソナルな軌跡を、出来得る限り跡付けることにある。これらの調査には、多くの史料的な困難が付きまとっている。大学公文書類の収集・整理をさらに充実する一方、旧制高等学校の同窓会などの協力が不可欠である。

以上、史料的な側面を取りあげ、今回の調査の概要を述べてきた。本調査には関係各位のご支援とご協力が不可欠であることは、言うを待たない。調査は開始されており、すでにご協力をお願いした機関もあるが、さらに多くの学内外の関係機関、各位のご支援、ご協力をお願いする次第である。

（東京大学史史料室長・法学部教授）

出陣、戦没学生に関する調査について

中野　実

ここでは学徒動員、出陣に関する調査のうち、実態の分析の概要を記しておきたい。実態の分析とは、「学生などの勤労動員先の調査、入隊、入団と復員あるいは戦没などのパーソナル軌跡」（高橋室長のまえがきから）を明らかにすることであるが、いまだようやく開始したばかりで予備調査の段階にあるため、今回は出陣、戦没学生の資料を概観するにとどまる。

最大の難関は、いったいどのくらいの学生たちが動員、出陣し、亡くなったのか、という点である。せめてこの概数が把握されていれば、調査の大枠が確認されるのであるが、それが出来ない。このため実態の調査には情報の得られる対象を広げかつ深める必要がある。学部が持っている学籍簿をはじめとして、事務局・学生部の公文書類、各学部の卒業者名簿、学外機関の資料など、網の目のように資料をクロスさせて漏れ落ちを最小限にしなくてはならない。試行錯誤と聞き取りによって、まとまった資料群の一つとして設定したのが旧制高等学校の同窓会名簿類である。各同窓会にご寄贈をお願いして、名簿から学生の消息を摑むという作業をはじめた。寄贈を受けた名簿類を便宜的に次頁に一覧化した（なお、同窓会などの所在調査にあたっては旧制高等学校記念館にお世話になった）。

名簿等の記載内容を形式、戦没記載の有無、入学大学名の有無の３つに区分してみた。たとえば四高同窓会の名簿を例にとって説明してみよう。四高の場合、形式は総合型であり、戦没の記載があり、四高からの入学先大学が明記されている。戦没学生の抽出にあたってはきわめて便である。形式の記載は総合型も分離型もほぼ卒業年別学科別に記載されており、入学先が記載されていれば、戦没の記載はなくとも学科別に照会してご教示をお願いすることが出来る。分離型で入学名がある名簿がそれらに該当する。ところが、入学名がない場合、もう一つの作業が必要になる。（なお、入学名の記載はないが、学士・学位を明記している名簿は多い。）それは、今回収集した名簿ではなく、各年度の刊行される名簿類を調査することである。というのも、旧制高校を卒業し大学に在学中には当該大学名（学部を含むこともある）が記載されているからである。ここで入学先を確定し、現在の名簿から該当者を抽出することが可能になるのである。ただこの方法の最大の問題は、昭和18年、19年頃の会員名簿が作成・刊行されているのかどうかである。これらはあらたな資料収集の対象となってきている。戦没の項目はさきに記したように、記載があるものはそれを採用できるし、なくとも照会などの方法を採ることが出来る。この戦没の記載内容はたんに戦没（あるいは戦病死なども含む）だけであったり、戦没年月日、場所なども記載しているものまで、いろいろある。今回の調査では出来るなら大学入学以前の修学歴、戦没年月日、場所なども把握したいと思うのであるが、それには旧制高等学校の名簿以外の名簿類も必要となってくる。また、もちろん、東大の入学者は旧制高等学校出身者ばかりではない。昭和16年度の入学者には他大学からの転学者をはじめ名種専門学校卒業生、軍関係卒業生などもいた。このため、もう一つの資料群として旧陸海軍の名簿も収集している。こちらはいまだ一覧化していないが、戦没の情報は格段に詳細である。

今回は旧制高等学校名簿を中心に調査の概要を記したが、もっと多くの資料を収集しなければならないことは明白である。今後とも資料の所在情報をはじめとして、ご協力をお願いしたい。

旧制高等学校等受贈同窓会名簿等一覧（順不同）

誌　　名	刊行年	形式	戦没の有無	入学大学名の有無	備考（クラス幹事名等の記載）
第一高等学校同窓生名簿	平成３年	総合	有	無	名簿委員会名簿
第二高等学校尚志同窓会会員名簿	平成３年	総合	有	無	理事会名簿
四高同窓会会員名簿	平成３年	総合	有	有	
五高同窓会会員名簿	昭和62年	総合	有	無	役員名簿
第七高等学校造士館同窓会員名簿	平成２年	総合	有	有	役員名簿
旧制佐賀高等学校菊葉同窓会会員名簿	平成元年	総合	有	有	役員名簿
成城学園同窓会会員名簿	平成４年	総合	有	有	役員名簿
旧制浦和高等学校同窓会会員録	平成２年	総合	有	無	クラス幹事名
大阪高等学校同窓会会員名簿	平成４年	総合	有	有	名簿委員会名簿
旧制静岡高等学校同窓会会員名簿	平成４年	総合	有	有	
旧制新潟高等学校同窓会六花会名簿	平成３年	総合	有	有	役員名簿
水戸高等学校同窓会員名簿	平成４年	総合	有	無	役員名簿
山口高等学校鴻南会名簿	平成元年	総合	有	有	
旧制旅順高等学校同窓会向陽会名簿	平成３年	総合	有	有	役員名簿
旧制福岡高等学校同窓会青陵会会員名簿	平成４年	総合	有	有	役員名簿
桜友会会員名簿（学習院）	平成４年	総合	無	無	
京城帝国大学・京城帝国大学予科同窓会会員名簿	平成２年	総合	無	有	役員名簿
三高同窓会会員名簿	平成５年	総合	無	無	理事会名簿
旧制富山高等学校同窓会会員名簿	平成５年	総合	無	有	
広高関東同窓会会員名簿	平成５年	総合	無	有	
台北帝国大学予科同窓会蘭香会名簿	平成３年	分離	有	無	クラス委員名簿
旧制弔南高等学校		分離	無	有	コピー
蕪葉会名簿（台北高校）	平成５年	分離	無	有	役員名簿
成蹊高校（旧制）同窓会名簿	平成６年	分離	無	有	役員名簿
旧制浪速高等学校同窓会会員名簿	平成４年	分離	無	有	役員名簿
旧制姫路高等学校同窓会名簿	平成５年	分離	無	有	役員名簿
武蔵高等学校同窓会会員名簿	平成５年	分離	無	有	役員名簿
ふすま同窓会会員名簿（山形高校）	平成４年	分離	無	有	役員名簿
北海道大学東京同窓会会員名簿	平成２年	―	無	無	役員名簿

（作成：鈴木敏行）

注：形式を総合型―現役と物故者を一緒に掲載しているものと、分離型―現役と物故者を別個に掲載しているものとに分けた。このほか北海道大学東京同窓会会員名簿も寄贈を受けたが

大学沿革史にみる「学徒出陣」――旧帝国大学編

山本敏子・奈須恵子

現在、東京大学史史料室では、本学における学徒動員・出陣調査の基礎作業として、関連参考文献における事実関係の収集・整理、先行研究の調査、年表作成等を行なっている。本稿では、その一環として検討中の大学沿革史のうち、旧帝国大学の沿革史を素材に「学徒出陣」がどのように記述されているかを紹介し、あわせて今後の課題を著した。

いわゆる「学徒出陣」が始まった1943（昭和18）年の時点で、大学は、植民地に設立されたものを含めて、①帝国大学（官立総合大学）9校、②官立単科大学13校および公立大学2校、③私立大学28校、合計52校存在した。本稿が対象とするのはこれらの大学沿革史の通史編および史（資）料編、写真集である。以下、主に設置主体を中心とする上記の分類に従って順次紹介することにしたい。

旧帝国大学（官立総合大学）と「学徒出陣」

今回、対象となる大学沿革史を調査したところ(表1参照)、当時その大学に法文系学部が設置されていたか否かが、「学徒出陣」に関する記述の大きな分岐となることがわかった。それは次のような事情による。

高等教育機関在学者を一刻も早く総力戦体制を支える兵力、労働力にしようとの動きは、日中戦争開始以降、既に実行に移されていたが、1943年10月2日勅令第755号「在学徴集延期臨時特例」では、高等教育機関在学者に対する徴集延期停止が規定された。ただし、この規定の適用には「教育ニ関スル戦時非常措置方策」などによる例外的措置が設けられた。1)理科・工科系の学生　2)医科の学生　3)農科学生の一部　4)教育関係諸学校の生徒　5)高等水産の航海関係の生徒などは、徴兵検査で現役兵となっても卒業までは入営延期となったのである。

つまり、徴集延期の停止が即入営を意味したのは法文系学生についてであって、理工系学生はこれに該当しなかったということである。沿革史における「学徒出陣」関連の記述が、法文系学部の有無により相違する理由はこのことによる。

(1)　まず、43年時点で法文系学部を擁していた帝国大学――東北、東京、京都、九州、京城、の各帝国大学（台北帝国大学についての沿革史は日本では未刊）――を扱った沿革史において「学徒出陣」についてはどのように扱われていたのかを整理しておく。

いずれの沿革史でも「学徒出陣」に至る過程を、在学・修業年限短縮と徴集延期短縮から停止へという制度史上の変化の中で、ほぼ6、7ページ程で扱っている点は共通しているが、具体的な記述には沿革史個別の特徴が現れている。その中でも目を引く特徴を以下に挙げる。なお、今回取り上げた大学の「学徒出陣」関連データの整理は、典拠資料が示されていないものもあり留保つきではあるが、表2にあげた通りである。

①　法文系学部の動向の強調

この記述の特徴が見られる通史は、東北大学と九州大学の沿革史である。

『東北大学五十年史』は、「学徒出陣」を頂点とする大学の戦時体制化の動きを1937（昭和12）年ごろからの一連の動きとして捉え、説明する構成をとっているが、特に法文学部の動向は記述の大きな焦点の1つとされている。法文系学生の徴集延期停止による「学徒出陣」という事態は、当時の「法文学部の冷遇」という文脈において解説され、学生に対する措置のみならず、当時の法文学部教員の定員削減（反対に理・医・工学部では増員）にも言及して、戦時下の全般的な学部、学科再編の動向との関わりの中で「学徒出陣」を改めて位置づけている。

なお、通史の記述の中ではないが、京城帝国大学の『紺碧遙かに』に所収されている回想の1つにも、徴集延期停止は「事実は文科

表1　旧帝国大学沿革史における「学徒出陣」の記述

大学名	沿革史名 （刊行年）	「学徒出陣」 言及の有無	言及箇所 （ページ）
東京帝国大学 （現・東京大学） 法・医・工・文理・ 農・経済	『東京大学百年史通史二』 （1985年）	○ ㊟	第六編　戦時下の東京帝国大学 ・第一章　戦時下の学制改革動向と財政 第二節　東京帝国大学の審議と再編 「三　年限短縮問題」 十八年十月在学徴集延期取消/学徒出陣（648頁） ・第三章　戦時体制下の諸動向 第二節　戦時動員体制 「四　学徒出陣」（835～842頁） 昭和十八年十月徴兵猶予停止/全国文系大学生は約三万五〇〇〇名/九月二十五日の繰上げ卒業式/臨時徴兵検査/十月一日入学式/諸学部の壮行会/学生取扱の件/服役中は休学/一部は仮卒業/帰還後の補講/復学の要領/徴集者名簿/神宮外苑壮行会/仮卒業証書授与/理系の拡充と文系の移転を考慮/理系学生は三～四年入営延期/全学会の壮行会/十二月入営入団/東京帝大の入営休学者二八八四名/以後の学園風景/食堂長蛇の行列/十八年の徴兵年齢一歳引下げ
	『東京大学百年史資料一』 （1984年）	○	第一部　法令並びに規則 ・一〇　その他 「学徒出陣壮行会」（979～988頁） 一　文部省主催「学徒出陣壮行会」ニ関スル件 二　出陣学徒壮行会開催ニ関スル件 三　出陣学徒答辞 四　東京帝国大学出陣学生壮行会
京都帝国大学 （現・京都大学） 法・医・工・文理・ 経済・農	『京都大学七十年史』 （1967年）	○ ㊟ 絵画	第1編　総説 ・第2章　帝国大学時代 第4節　戦時下の大学 「第1項　戦時体制」（124～127頁）
	『京大史記』 （1988年）	○ ㊟	本紀編 ・図録京大九十年「軍事色に染まる大学」（67～69頁） 世家編 ・語り継ぐこころ「学徒出陣の末に」（334頁）
東北帝国大学 （現・東北大学） 理・医・工・法文	「東北大学五十年史上」 （1960年）	○	第一部　通史 第五編　戦時下時代 ・第三章　学徒出陣と勤労動員 「第一節　法文系徴兵猶予停止」（440～445頁）
九州帝国大学 （現・九州大学） 医・工・農 法文・理	『九州大学五十年史通史』 （1967年）	○	第5編　戦時下時代 ・第4章　戦時体制の強化 「第2節　学徒出陣」（489～496頁）
	『九州大学七十五年史通史』 （1992年）	○	序編　九州帝国大学時代 ・第三章　昭和期の九州帝国大学 第五節　九州帝国大学の学生生活 「勤労動員と学徒出陣」（91～92頁）
	『九州大学七十五年史 史料編　上巻』 （1989年）	○	第二編　九州帝国大学 ・第四章　戦時下の九州帝国大学 「第五節　戦時下の学生生活」（727～731頁） 二九五　学生に動員/二九六　学生諸子に告ぐ/二九七　送別の言葉
北海道帝国大学 （現・北海道大学） 農・医・工・理	『北海道大学創基八十年史』 （1965年）	○	第三編　北海道帝国大学 ・第四章　今総長時代 三　学徒動員 「学徒出陣」（181頁）
	『北大百年史　通説』 （1982年）	○	・第六章　戦時期の北海道帝国大学（1930～1945） 第二節　戦争下の北海道帝国大学 「学徒出陣」（293頁）
大阪帝国大学 （現・大阪大学） 医・理・工	『大阪大学二十五年誌』 （1956年）	×	
	『大阪大学五十年史通史』 （1985年）	△	第2編　大阪帝国大学の創立と発展 ・第10章　戦時下の大学生活 「第4節　報国隊の結成と勤労動員」（212頁）
名古屋帝国大学 （現・名古屋大学） 医・理工	『名古屋大学五十年史通史』 （未刊行）	——	
京城帝国大学 法文・医・理工	『紺碧遥かに ―京城帝国大学創立 五十周年記念誌』 （1974年）	○	戦時体制下の学園 ・戦時下の学園 「日本人学徒の出陣」（445～449頁） 徴集猶予の停止/学徒出陣壮行会/動員学徒の手記 「朝鮮人学徒の出陣」（450～455頁） 特別志願への呼びかけ/韓国同窓の追想/母姉への呼びかけ/志願学徒の訓練 〈回顧〉（456～477頁）
台北帝国大学 文政・理・農・医・ 工	（未刊行）	——	

註1）㊟は「学徒出陣」の写真が掲載されているものを示す。なお、以下の写真集が刊行されており、いずれも「学徒出陣」の写真が掲載されている。『写真集　北大百年　1876～1976』（1976年）、『東京大学の百年　1877～1977』（1977年）、『写真集　九州大学史　1911～1986』（1986年）、『写真集　名古屋大学の歴史　1871～1991』（1991年）。

註2）『京都帝国大学史』は1943年12月発刊だが、「学徒出陣」への言及はなく、検討対象外とした。

系学問の無視であり、関係学部のとりつぶしと考えるしかなかった。」との観点から述べられたものがある。

『九州大学五十年史』の場合は、1944（昭和19）年に起こった、九州帝国大学法文学部学生の京都帝国大学への委託問題を取り上げている。そこではまず、44年以降の文科系大学および専門学校に対する、理科系への転換と、文科系学部・学校の移転整理問題に触れている。さらにこの時、文部省から京都帝国大学への法文学部委託案を示された九州帝国大学側の対応を、「九州帝国大学法文学部教授会意見書」によって紹介している。『九州大学五十年史』は他にも当時の資料をいくつも用いているのが特徴的である。

② 全般的な政策動向と学内動向との関連への言及

これは東京大学の沿革史の特徴である。

『東京大学百年史』は、学部長会議、評議会の記録等の学内史料を多用し、文部省との交渉、さらには背後にあったと思われる軍部の動向までも含んだ言及を行っている。

特に1941（昭和16）年9月の在学・修業年限短縮の措置については、東京帝国大学側が年限短縮に対して強い反対意見をもっており、その中止に向けて枢密院や文部省に働きかけていたことを、学内史料をもって示している。また、それにも拘らず、卒業繰り上げが強行されたのは、陸軍での幹部士官等の不足という事情による一方的な抜打ち決定であったということも史料を通して述べられている。

徴集延期停止も、基本的に科学動員や学徒勤労動員と並ぶ形で位置づけられているが、その「学徒出陣」については、壮行会など学内の動きとともに、その前後の文部省や陸軍省からの指令が具体的に述べられている。ただし、43年10月の徴収延期停止の時に「出征した学生の総数は今もって明らかではない。」とされている。

③ 旧植民地における「学徒出陣」についての言及

1943年10月20日、陸軍省令第48号「昭和十八年度陸軍特別志願兵臨時採用規則」によって、朝鮮および台湾出身者は、志願という形をとって兵役の対象に組み入れられることを決定づけられた。

この点に関して、京城帝国大学の創立五十周年記念誌である『紺碧遙かに』では、「日本人学徒の出陣」とともに「朝鮮人学徒の出陣」がとりあげられており、そこでは、植民地朝鮮出身の学生の反発と、それに対する大学側からの強い働きかけの経緯が述べられ、「志願」が事実上の強制であった旨が、関係者の回想を交えつつ記されている。他沿革史には見られない大きな特徴となっている。

以上、今回対象とした沿革史において注目された特徴を3点挙げた。

なお、『京都大学七十年史』や『九州大学七十五年史　通史』での「学徒出陣」は、戦時体制下の大学の全般的動向を概略しその中に位置づける形の、短い言及であった。

(2) 次に、法文系学部を欠く帝国大学――北海道・大阪・名古屋の各帝国大学――を扱った沿革史をみると、「学徒出陣」への言及はわずかである。

現在刊行中の『名古屋大学五十年史』はまだ通史編が出されていないので、名古屋帝国大学の場合は留保を必要とするが、北海道大学・大阪大学の沿革史の場合、表1に見るように「学徒出陣」について1ページ程で簡単に記述するか、全く触れないかである。

それは『大阪大学五十年史通史』の次の総括に端的に表現されていると言えるだろう。「『教育に関する戦時非常措置方策』によって理工科系統などを除く一般学生の徴兵猶予を停止するなどの措置をとった。文科系学生はこれによっていわゆる『学徒出陣』した。本学は理科系であったため、『出陣』はなかった」。冒頭にも述べた1943年10月の措置が背景にはあり、むしろ学徒動員に力点が置かれた記述となっている（『北海道大学創基八十年史』も同様）。ただ、直接「学徒出陣」に関わるものではないが、大阪帝大関係者の戦没者について具体的なデータに即して言及しており、その中で医学部の軍医としての従軍戦死に触れていることは特記しておきたい。

もう一方の北海道帝国大学では、先の三学部に農学部を加えていたために、『北大百年史

表2　沿革史に見る「学徒出陣」関連データ

大学名	「学徒出陣」関連のデータ
東北帝国大学	43年10月1日の入学者数 851名。 内、法文学部の入学者数 375名。
東京帝国大学	43年12月31日現在の在籍者数9711名。 休学者を除くと6623名の在籍。 入営による休学者は2884名。
京都帝国大学	43年の徴集延期停止の際の臨時徴兵検査の結果、残留したのは法学部約19%、文学部約30%、経済学部約30%の学生。文科系学生の約8割が学業半ばで入隊。「学徒出陣」によって在学生は3分の1に激減。
九州帝国大学	43年10月2日の法文学部入学者数366名。 内、残留し得る者は111名(法科56名、経済科47名、文科8名)。 43年12月15日提出の「臨時徴兵検査受験者数調書」における法文学部全学生の実態— (1)臨時徴兵検査受験者724名（内丙種以上の者719名、丁種以下の者5名)、(2)未適齢者126名、(3)既徴兵検査済者134名、(4)半島出身者(志願者13名を除く) 9名、(5)留学生、女子学生7名、合計1000名。
京城帝国大学	43年11月5日時点での、朝鮮人学生の陸軍特別志願兵への志願者数は8名。

通説』の中で、農学部農学科・農業経済学科・農業生物学科・水産学科の一部（生物系）の学生、農学実科・林学実科・予科の生徒が「学徒出陣」のためにほとんど入営し、これらの学科が壊滅状態となったことが指摘されている。

旧帝国大学（官立総合大学）の沿革史にみる「学徒出陣」に関する記述は以上の通りであるが、最後にまとめとして今後の課題も含め三点ほど触れておきたい。

第一に、「学徒出陣」関係の学内史料について言えば、繰り上げ卒業式や出陣学徒壮行会・学徒出陣激励の運動会・音楽会等の実施に関しては多くの沿革史で言及されており、特に、『九州大学五十年史』や『東京大学百年史』では大学新聞を史料に当時の学生の様子を断片的ながら紹介している。しかし、ここに至る大学側の対応や正確な出陣学徒数・戦没者数の実態は明らかではなく、公文書類や徴集者名簿等の発掘が今後さらに必要とされる。また、学徒出陣に関する回想の網羅的収集も課題として残る。

第二に、「学徒出陣」は法文系学部と密接な関わりをもつものだが、これをより大きな文脈からみれば、理工系学部等も含めて戦時下における高等教育段階の人材養成・配分というマクロ・レヴェルの政策上の問題がある。従ってまた、大学における戦時体制の再編問題や学徒動員も合わせて検討する必要がある。

この点と関わって第三に、「学徒出陣」そのものではないが、医学部の場合には、入営延期の措置がとられたものの学生の中には卒業後戦地に赴いている者もおり、軍医要員としての応召に留意する必要がある。

(山本敏子　大学院教育学研究科博士課程
奈須恵子　大学院教育学研究科博士課程)

戦歿学徒を弔ふ

戦歿並に殉職者慰霊祭における南原総長告文

今次大戦に於て出陣したるのみに永久に還らぬわが若き同友学徒諸君のため、ここに哀しき記念の式を挙行せんとして、感懐尽くるところを知らない。

顧ればこの幾歳、われわれ国民は何処をどう辿り来つたか。混沌錯乱、恰も模糊たる夢の中を彷徨しつつあった如くである。併し、それにしては余りに厳しき歴史の現実であり、つぎつぎに大なる事件の発生、それによる不安と焦慮、緊張と興奮、絶望と悲哀の交織であった。唯一事、それを貫いて今や白日の下に曝されたことは、軍閥・超国家主義者等少数者の無知と無謀と野望さへによつて企てられた只戦争一途と、そして没落の断崖目がけて国を挙げての突入であつた。

されば長き中日事変に続いて、遂に国民の運命を決した太平洋戦争の勃発に於て、その緒戦における捷報にも拘らず、本学園の雰囲気は却つて沈痛、諸君は敢て動きはしなかつた。『童衛に笛吹けども君たちは踊らなかつた』のである。蓋し、真理の探求に従事しその身をおく者には、彼らの理性と良心がそれをさせなかつたのである。殊に哲学・政治・法律・経済の学を攻究する者に取つては、最初より余りに事の背理と無謀なるを知つてゐたからである。諸君は只黙々として自己の本領、学徒としての本文に従事し、またわれら教師はさやうに説き且つ教へ来つたのである。

然るに一たび動員下令、学生の特権が停止させられて戦に召さるるや、諸君はペンを剣に代へて肅然として壮途に上つた。その際許多学徒のうち誰一人、嘗て諸国に見られた如き命を拒んで国民としての義務を免れんとする者は無かつた。諸君のすべては国家の意志と命令に忠実に従つたのである。日頃それを教へた我らが正しかつた否かを知らぬ。諸君は謇に黙つて従つたばかりではない。忘れもせぬ先年十一月学徒一斉出陣の秋、いかに愛国奉公の情熱に燃えて、諸君は勇躍して我らの許を立つたか。更に涯しもなき戦場や内外の陣地に於て、勇戦敢闘、生命を賭して克く軍人としての任務を遂行したか。その間の労苦と艱難はそれを共にした者のみの能く知るところであらう。

併し、諸君は何事も知らざる只の兵士とは異つてゐた筈である。諸君は武人たると同時に学徒であつた。諸君は徒らに獨断狂信的なる「必勝の信念」を以て闘つたのではない。戦と決したる以上「勝たざるべからず」との決意をこそすれ、諸君は何よりも正義と真理の勝利を乞ひ願った筈である。然るに不幸にして真理と正義は我らの上にはなく、米英の上に止まつた。それは只に「戦に勝つた者が正義」といふのではなく、世界歴史における厳然たる「理性の審判」であり、我ら共に敗残の悲痛の中から厳かにその宣告を受け取らなければならぬ。

諸君は客年八月十五日、わが邦肇国以来の呪はしき運命の日を目撃しなかつた。かの日の我らの痛恨—それは外に対するよりも寧ろ自己自らに対する悲憤、それ以来受けつつある国民の生活の悲惨、更にそれにもまさつてわれわれの精神の苦痛は、正に民族の負へる「現実の十字架」である。われわれは飽くまでもそれに堪へ、忍ばなければならぬ。国民はいま戦争にまさる一大試練の中を通過しつつあるのである。

併し諸君に告げ度いことは、我らの行手に民族の新たな曙光、大いなる黎明は既に明け初めつつあることである。今やわが国は有史以来の偉大なる政治的社会的精神的変革を遂げつつある。我らはそれを通して平和と道義の真正日本の建設と新日本文化の創造を為さなければならぬ。これこそは就中われわれ学徒が精魂を傾けて成し遂げぬばならぬ偉業であり、心血を注いでの我らの新たな戦—「理性」を薔薇の花として、それと厳しき「現実」との融和を図る平和の戦である。

この平和の戦と新たな建設に於て、わが大学の荷へる責務は極めて重い。諸君の出征中、我ら後に残つた者は真理の殿堂を守つて、勤労作業やもろもろの悪条件の下に学問の研究を継続しつつ、寧ろ今日の日のために備へ来つたのである。その間幾たびの激しき空襲下、大学を戦火より免れしめんがために、職に殉じた者もある。われわれは陰れたこの尊き犠牲を決して忘れはしないであらう。まことに多数学徒が出で立つた後の大学は寂寥そのものであり、銀杏並樹の下に殆ど人影を見なかつた時もある。

戦終つて何処からともなく集り来つた我らの仲間を、われわれはいかに喜び迎へたことであらう。諸君と同じく肩を並べて出征した戦友の恐らくは死するにまさる恥を忍んで還り来つたのも一にこれからの新たな戦——大学の復興と祖国再建の事業に参加せんがためである。今は殆どそのすべてが還り来つた中に、幾多俊秀の遂に再びいづれの教室にも研究室にも見出され得ぬことは、我らの限りなき痛恨である。

憶へば諸君のうちには、いよいよ戦地に出発すると云つて、倉皇の時の間をわれわれの許を訪ねて呉れたのも永遠の別離であつた。また諸君が陣中より切々の純情を綴つて送つて呉れた書簡に、我ら幾たび涙したか知れぬ。まことに諸君は凡そ学園とは懸け離れた厳しき軍律の世界に身を置き、殊に遠く故国を離れた戦地に在つて、一しほ大学を恋ひ、学問を思ひ、かかる師をさへ師として懐しんで呉れた。我ら屢々その一人々々の名を呼んで天地に訴へ度い衝動をどうすることもできぬ。ましてや諸君を生み、これまで育て、家庭相団欒した諸君の父母兄妹の心を思へば、今次の戦争が無名の師であつた丈に、人間として同胞として転た痛嘆と同情に堪へぬものがある。

併し、かくの如きはこの戦争に於て、わが民族の献げねばならなかつた犠牲——国民的罪過に対する贖罪の犠牲に外ならぬ。諸君は同胞に代つて自ら進んでこれに当り、莞爾として死地に就いたのである。諸君はわれらに対つて語る如くである。『今にして誰を恨み誰を咎めようぞ、全学全国民心を一にして祖国再建の事業に当られよ。これわが永世の悲願である』と。然り、我らは諸君のこの尊き犠牲の上に新たに祖国を再建しなければならぬ。祖国は断じて滅亡せしめてはならぬ。我らは諸君の意志を嗣ぎ、全学一致団結、国民の中核となり、新日本建設と新文化の創造に邁進しなければならぬ。

諸君の嘗て幾たびか集つた思出多き講堂、別しても先年全学の壮行会を開いて此処から出で征いたその同じ場所に於て、けふ追悼記念の式を挙ぐるに当り、諸君の霊は必ずや帰り来つて此処に在るであらう。その英霊を囲んで、学園にふさはしく何の宗教的儀式をも持たぬ純一無雑な慰霊祭に於て、不肖ながら自ら祭主となつて執り行つた我らの衷情を諸君は屹度酌んで呉れるであらう。

いまわが心の悲しみ拙詠二首挽歌として霊前に献げ度いと思ふ。

桜花咲きのさかりを益良夫(ますらを)のいのち死にせば哭(な)かざらめやも

戦に死すともいのち甦り君とことはに国をまもらむ

信愛なるわが若き同友学徒の霊よ、翼ば饗けよ。

（昭和二十一年三月三十日）

（出典：『大学新聞』昭和21年４月１日付）

学徒動員・学徒出陣関係調査日誌（平成５年11月～平成６年３月）

11. 1 月　学徒動員・学徒出陣関係調査開始
11.22 月　中野室員、駒場祭で開催された学徒出陣50周年の講演会に行く。課目「元学徒兵の語る戦争体験」(永富博通氏)。
11.25 木　中野室員、「海軍技術戦記」「軍艦総長平賀譲」の執筆者、内藤初穂氏を訪問。
11.26 金　中野室員、神奈川大学へ学徒出陣50周年の講演会へ行く。題目「戦後―生活のなかで戦争を考える」(田中正俊氏)。
12.16 木　高橋室長、法学部所蔵の「兵休名簿」等の資料持参。
12.22 水　武蔵高等学校同窓会に名簿の寄贈について照会。
平成６年
１.17 月　調査手伝いのためアルバイト２名を雇用。
１.21 金～１.22 土　中野室員、福島大学戦没学生調査の概要についての聞き取りのため同大学へ出張。
２. 8 火　「学徒出陣50周年にあたって―私立大学総長・学長の共同声明」を入手。
２. 9 水　三高同窓会に連絡。
２.12 土　中野室員、旧制高等学校記念館を訪問。
２.16 水　元応用微生物研究所事務長大野勝男氏、学徒動員・学徒出陣関係簿冊類についての助言のため来室。
２.21 月　旧制高等学校同窓会等あて名簿類の寄贈願を発送（37件)。
３. 3 木～３. 5 土　中野室員、所蔵資料調査のため京都大学、三高同窓会、立命館大学に出張。

学徒動員・学徒出陣関係購入図書及び寄贈旧制高等学校同窓会名簿一覧

購入図書

学徒出陣、きけ　わだつみのこえ、第二集きけわだつみのこえ、良心的兵役拒否の思想、戦争のなかの青年、何も語らなかった青春、学徒兵の青春、一学徒出陣50年目の答案―、最後の学徒兵―BC 級死刑囚・田口泰正の悲劇、学徒出陣から五十年、回想学徒出陣、「学徒出陣」落第記、増補学徒動員・学徒出陣、「学徒出陣」前後、海軍飛行科予備学生学徒出陣よもやま物語、学徒出陣――航海士の手記、学徒出陣の記録（京都編１)、〈戦争を知らない世代へ37〉、学徒、戦争、捕虜。

同窓会名簿等寄贈依頼先

第一高等学校同窓生名簿、第二高等学校尚志同窓会会員名簿、三高同窓会会員名簿、四高同窓会会員名簿、五高同窓会会員名簿、六高同窓会、第七高等学校造士館同窓会会員名簿、第八高等学校同窓会、旧制浦和高等学校同窓会会員録、大阪高等学校同窓会会員名簿、桜友会会員名簿（学習院)、京城帝国大学・京城帝国大学予科同窓会会員名簿、高知高等学校同窓会、旧制甲南高等学校同窓会名簿、旧制佐賀高等学校菊葉同窓会会員名簿、旧制静岡高等学校同窓会会員名簿、成蹊高等(旧制)同窓会名簿、成城学園同窓会会員名簿、蕉葉会名簿(台北高校)、台北帝国大学予科同窓会蘭香会名簿、東京高等学校同窓会、旧制富山高等学校同窓会会員名簿、旧制浪速高等学校同窓会会員名簿、旧制新潟高等学校同窓会六花会名簿、旧制姫路高等学校同窓会名簿、旧制弘前高等学校同窓会、広島関東同窓会会員名簿、旧制福岡高等学校同窓会青陵会、府立高等学校同窓会、北海道大学東京同窓会会員名簿、松江高等学校同窓会、松本高等学校同窓会、松山高等学校同窓会、水戸高等学校同窓会会員名簿、武蔵高等学校同窓会会員名簿、ふすま同窓会会員名簿(山形高校)、山口高等学校鴻南会名簿、旧制旅順高等学校同窓会向陽会名簿

史料室日誌抄録（平成５年９月～平成６年２月）

8.26 木～11.30 火　ベルツ・コレクション―帰ってきた幕末・明治の絵画―展開催（ドイツ日本研究所・ドイツ・リンデン博物館・朝日新聞社主催）のためベルツに関する史料の展示協力。

9. 3 金　庶務部庶務課法規第二掛より官報17箱を史料室書庫へ搬入。

9.10 金　東京大学史史料センター概算要求の審議のため第２回ワーキング・グループを開催。

9.14 火　第22回東京大学史史料研究会開催。

9.22 水　平成５年度史料管理学研修会（国文学研究資料館主催）出席者５名が研修の一環として史料室を見学。

11. 1 月　中野実氏（教育学部助手・文部事務官庶務部庶務課併任）室員として着任。

11.16 火　第23回東京大学史史料研究会開催。

11.18 木　九州大学より史料室の運営参考のため２名来室見学。

11.30 火　「東京大学史史料室ニュース」第11号発行。

12. 9 木　京都大学より百年史編纂の参考のため１名来室見学。

12.16 木　第34回東京大学史料の保存に関する委員会開催。平成６年度史料室予算を承認。平成７年度概算要求について審議。

1.13 木　史料室保管『文部省往復』のマイクロ化のため昭和５年から昭和16年までの予定でマイクロ撮影開始。

1.17 月　学徒動員・学徒出陣調査のためアルバイト２名を雇用。

2.15 火　高橋委員長、史料室の将来計画について青柳総合資料館長と打ち合せ。

2.23 水　第35回東京大学史料の保存に関する委員会開催。平成７年度概算要求について審議。

2.24 木　憲政記念館へ「日本議会政治の歩み特別展」の展示史料として「加藤弘之史料　最新論」を貸し出し。

この間の閲覧者延数

学内者　48名
（内フランス人12名、台湾人23名）

学外者　87名
（アメリカ人１名、台湾人３名）

主な学外閲覧者所属機関

群馬大学、明治大学、立教大学、東洋大学、香川大学、北海道大学、京都大学、ミシガン大学、イリノイ大学、法政大学、憲政記念館、江戸東京博物館、福岡教育事務所、東京都北区教育委員会、大但馬展実行委員会、NHK

文献撮影・複写許可件数　10件

調査（照会）件数　88件

※紙面の都合により連載中の「東大の記録管理」は休載します。

題字　森　亘元総長

東京大学史史料室ニュース　第12号

Archives Section of the University of Tokyo

発行日：1994年３月31日（年２回刊）
編集・発行：東京大学史史料室
東京都文京区本郷７－３－１
電話（3812）2111内線2036
印刷所：よしみ工産株式会社
北九州市戸畑区天神１―13―５